

4

アカマツ林ものがたり

＜アカマツ林への関心＞

96年ごろ中村レンジャーが油山のアカマツ林の希少性について話をされました。その後、折に触れ会員の間でも話題になるなど、会の中でアカマツへの関心が強くなっていきました。97年6月にはアカマツ林を保全する意義や管理方法について九州芸術工科大学（当時）の重松敏則先生による現地視察と勉強会がおこなわれました。「今となって思えば、中村氏にまんまんとはめられたようにも思う（初代世話役・清水さん）」というのが始まりでした。会員のアカマツ林への関心は高まってきたが、活動はすぐには始まりませんでした。作業量を増やしたくないという意見や、雑木林として多様な生物が見られる現状の林に人為的に手を入れることへの抵抗からでした。また、森の管理作業としては、下草刈しか経験のないメンバーにとってノコギリを使う作業に対する安全上のリスクなどがネックになっていました。それで、話し合いを重ねた結果、話題が出てから1年後の97年秋に、清水賢治氏が世話役となり、有志で行うオプション作業という位置づけで実際に動き始めることとなりました。

貴重な油山のアカマツ林

昔はどこにでも見られたアカマツ林ですが、落ち葉かきや林内に生える常緑樹伐採がされなくなり、植生の遷移が進み、全国的に減少しています。油山のアカマツ林は県のレッドデータブックに貴重な植物群落として掲載されています。

＜保全作業のはじまり＞

保全作業に入る前に作業前後の森の変化を記録に残す必要があるという意見から、事前に3～4回ほど作業地の植生調査が行なわれました。膝よりも高く生い茂るシダをかき分けての作業で、厳密な調査内容とまではいかず、分かるものだけを記録に残したという感じではありました。

作業地は、センターに近い方をA地区、遠い方をB地区とし、A地区は混交林、B地区はアカマツ以外は皆伐としました。地区分けには明確な意図は無く、細長い地形を2分割にし、様子を見ながら作業を進めたいと考えました。作業は安全を最優先に考え、初年度は平らな地形の多いB地区から作業がはじめられました。林床はシダで覆われていて、深いところでは腰の高さまであり、シダを刈ると、アカマツの幹はシダのあった高さまで湿気で濡れて色が変わっていたのが印象

的でした。重松先生のアドバイスに従い、シダは年度ごとの生え方の変化を見るために刈った量を量



シダに覆われた作業前のアカマツ林 97年



作業後のアカマツ林 99年

ることとなり、5～10キロ程度くらいの大きさに束ね天秤ばかりに下げて計量しました。午前2時間、午後2時間の作業で何十束もでき、1日に100キロは刈っていたように記憶しています。一度刈られたシダは翌年には激減し、次年度からはあまり生えてこなくなりました。ただ、シダの根元から刈り取ってなかったので、刈り残された茎が翌年には乾燥し硬くなり、針山のような地面となって足を踏み入れることができなくなりました。硬い茎はカマでは刃が立たず、刈り込みバサミで再度刈り取る作業が必要となり2度手間になりました。



除伐は、98年の秋ごろから始められましたが、背丈以下の常緑の灌木のみをまず伐採することとなりました。会ではノコギリを使っただけの作業は初めてだったため、リスクの少ない小さな木から伐ることになりました。また、松葉かきなどの作業をあわせておこないました。そのような作業を続けるうちに、林床にアカマツの実生が見え始めてきました。シダに覆われていた鬱蒼とした森では考えられないことで、「思ったとおり」という手ごたえを感じ、作業の成果が出たことが嬉しかった」（清水さん談）という実感がありました。

＜よりよい管理のために＞

99年秋には松枯れが確認され、毎年数本の被害が出るようになりました。そのため、アカマツの管理者である森林公社（当時）による枯木の伐採、現存木への薬剤の注入などが行われ、現在も続いています。02年1月には、九州大学名誉教授の宮島寛先生を講師にお迎えし、マツの日本における文化的・歴史的背景や、生育のための科学的条件、地かきの実習などを行ないました。

02年6月に会員のアカマツ林の将来像に関する話し合いをおこない、「いつも元気なアカマツ林」として「①1本1本が元気なアカマツ林であること ②代々続いていく林であること ③会員以外の方への開放（広く市民に知ってもらおう）」という作業の目指す方向が確認されました。

保全作業としては現在、落ち葉かき・地かき、草刈、除伐などをおこなっています。03年度からは世話役が迫盛寛さんに交代し、除伐は直径20cmクラスのクスノキなど、大きな木の伐採も多くなってきました。また、東側尾根沿いや、通路の谷側など作業地を広げていきました。

それでも松枯れは毎年数本ずつ出ています。原因について考え、より良い管理方法を探るために、06年6月に富山大学の久米篤先生を講師にお迎えして勉強会を開きました。アカマツが他の植物との水の争奪戦に弱い特性であることなどをデータで示していただき、他の植物がなく、日が当たり、マツノマダラカミキリがいない環境を好むアカマツのための森づくりについて学ぶことができました。この結果は、後日話し合い、「06年からのアカマツ5ヵ年計画」（39頁）に反映されました。

油山にとって、さらには福岡県にとっても貴重なアカマツ林が枯木のない、元気な森として存続していけるように今後も管理していきたいと考えています。



03年6月撮影

5

森会 運営のあゆみ

行政が立ち上げたボランティア団体が自主的組織へと移行する。この分岐点がどこにあるのか、99年ごろの私たちは、その答えを必死に探していました。

自主運営組織となった今となって、その分岐点を「1本200円の鎌にある」と言う人がいます。施設行事の参加者という意識しかなかった私たちが、自分たちで道具を買って管理することを始めたときから、組織としての自覚が生まれたのだと。

施設ボランティアとして誕生した私たちは、数え切れない多くの方々の助けを借りながら、その環境の中で悩み、喜び、学び、この12年を歩んできました。

＜ミッションか楽しさか＞

施設の用意したプログラムに添って作業をすることは、楽しい雰囲気の中で心地よい汗をかく、充実した時間でした。しかし、ボランティアとして、何の目的でこの作業をするのかを考えはじめたときから、そもそも私たちは、何を求めて活動をする団体なのか、どういう森づくりを目指すのかということを、自分たちの言葉で語る必要性を感じるようになりました。そのため、99年には活動目的を確認するワークショップ（WS）を開き（24 分）、それ以降、森の将来像を考える WSなどを毎年開くようになっていきました。

会の活動目的（ミッション）を共通の言葉として確認できたことが、自主運営の一つのきっかけだったように思います。しかし、ミッションを持つボランティア団体としての自覚は、サークル的活動との齟齬を生みます。仲間たちとの楽しく気楽な時間を大切にしてきた会のカラーが、組織という縛りの中で窮屈になっていくのが感じられました。会の変化に抵抗を感じた人の中には会から距離を置く人もでてきました。ミッション性とサークル性の狭間で運営方針の葛藤が生まれました。みんなが活動に何を求めているのか、その声を求めて、この頃から毎年アンケートをおこない、会員の思いを形にしようと試みられました。会の規約の検討も開始から策定まで3年かけて話し合うなど、会の良い雰囲気を残しながら、ゆっくり組織化が図られました。

＜理想の森の形と制約＞

アカマツ林の管理は目的が明確なので、目的に適った作業が何か、その方法を探すことで管理計画を立てることができます。もちろん、自然観察の森という立地条件があり、観察資源として適した樹木などを残すという課題はあり、若干の価値観が入りますが考えを整理するのはそう難しいことではありません。課題は、カブトムシの森です。もともとの生息環境にない場所にカブトムシという宿命を背負わされた0.4haの森には、会員が様々な理想の森の姿を思い描いていました。そして、その思いを整理しても、それはあくまで願いでしかなく、さらに、土壌や地形、森の履歴などから生じる制約条件を加味していかなくてはなりません。さらに、「北部九州の里山の本来の姿である二次林を復元」し、「里山の象徴としてカブトムシなどの甲虫が生息・観察できるような森づくり」という前提条件までつけると、果たして「解」はあるのか。わたしたちは、まだその答えを模索しているところです。

また、施設ボランティアの制約を感じた大きな存在がカブトムシでした。一般来場者の「カブトムシの森にカブトムシがない」という非難の声に施設管理者は誠実に応えようとします。生物多様性という観点からカブトムシの持込を良しとしない森会と、市民の意向を受けた施設の方針という2つ

管理方法がカブ森ではとられた時期がありました。この件に関わらず、施設ボランティアとして自分たちの考えが反映できる範囲がどこまでなのかを確認することが必要でした。

＜施設ボランティア団体としての成果と課題＞

市の施設で活動が続ける最大の意義は、市民にとって親しみやすい場所で、森林や里山に関心を持ち始めた人たちの最初の入口となれることだと思っています。それに応えるためにも、会員に対して、森づくりに関する大切な情報をメールや会報、会議などを通じて常に発信することを心がけてきました。

また、保全計画を立てるために、自然科学の視点から森づくりを考える勉強会を開いたり、そこで得た新しい知見を、みんなで話し合っただけで森の形に還元していかうとするプロセスは、この活動の醍醐味でやりがいでした。わたしたちは最初、アカマツを保全するためにやっていた落ち葉かきの意義もよくわかっていませんでした。でも勉強会を重ねることで、今では会員なら誰しも（もちろん例外はあるでしょうが）、その意義を説明できるようになっています。遅々とした歩みの中にも、確実な学習成果は上がっていると感じています。

プログラム運営の面では、間伐などの作業の難易度があがってくるにつれ、安全管理の重要性が増しました。その対策として実施計画書（31 頁）の導入がありました。事前に計画書を作成することで、リスクの所在を洗い出して安全の先取りをおこない、円滑なプログラム進行ができるようになりました。ただし、この計画書は、安全の担保の代わりに管理というプログラムの硬直性を生みました。気ままな活動というかつての伸びやかさを代償として失うことになったのです。

03 年からは、企業などのボランティア体験の受け入れ事業も行うようになりましたが、これまで精度をあげてきたプログラム運営の実績、安全に対する取り組みなどの裏づけがあるからできる活動だと思っています。なお、これらの成果には、レンジャーという専門職員からプログラムへのアドバイスや、施設管理者との橋渡しなどのサポートがもらえる恵まれた環境にあることも大きな要因だと思っています。

活動の広がりとして、森会で経験を積んだ会員が地域で木工教室を行ったり、農業研修に行ったり、森づくり団体のネットワーク組織に入って活動する人もいます。逆に、地域で森づくりをやりたいので入会して学びたいという人や、複数の森林保全団体に掛け持ちで所属し、技術、経験、情報をそれぞれに展開している人もいます。森会で活動が続ける大切さとともに、多くの人がこの会での経験を生かして違うステージに進んでいることも、森の成長、森の広がりの方だと思っています。

近年の課題は、入会者の減少です。森会への入会者を募ることのできる最大の機会、自然観察センターが主催しておこなう「森づくり体験」行事です。市政だよりも広報が掲載され、一般市民にとって入りやすい機会ですが、体験後の入会率が非常に低くなってきています。会が経験を積み、スキルが上がってきたことが、逆に経験のない人たちにとっては距離感、敷居の高さとなっているのかもしれないと感じています。昨今、企業からボランティア体験の受け入れ団体としてオファーがあっていることなどを考えても、共感を持ってもらえる会のあり方は重要な課題となっています。

悩みながらのこれまでの活動でしたが、常に、みんなは何をしたいのかを問い続け、問われ続けてきました。そのことがこの会が守ってきた運営の姿勢だと思います。

発足と同時に発行されはじめた会報は、07 年 3 月で 71 号を迎えました。

正式名称は「みんなでつくる 森ものがたり」です。

（「読み物編」は 06 年 1 月に実施した「記念号発行にむけての座談会」や役員インタビューを元に編集しました）



作業の積み重ね

カブトムシの森とアカマツ林でみんながやってきた

保全作業（観察会や調査などは除く）の実績をご紹介します！

※【 】内はその年の作業日の延日数

- 95年 カブ 森：草刈（6/25、9/9）、苗床作り（11/25）、堆肥床整備（11/25） **【4日】**
- 96年 カブ 森：カブトムシ飼育小屋整備（5/25）、草刈（6/22、7/13、8/24）、
苗床整備（11/9）、堆肥床整備（12/14） **【6日】**
- 97年 カブ 森：草刈（7/5、13、19、26、8/23、30）、池づくり（1/25、2/22）
どんぐり撒き（10/25）、堆肥床整備（12/13）
アカマツ：草刈（11/30、12/13） **【12日】**
- 98年 カブ 森：草刈（6/13、27、7/4、11、18、8/1、8、22、29）、
池改修（2/28）、堆肥床整備（12/12）、実生移植（10/24）
アカマツ：草刈・除伐・落葉かき（1/17、31、2/7、11、21、3/1、7、8/8、
11/7、21、29、12/19） **【24日】**
- 99年 カブ 森：草刈（5/29、7/8、25、31、8/14）、池補修（7/8、8/28）、
枝落とし（2/6、9/25、9/23）、堆肥床整備（12/12）
アカマツ：草刈・除伐・落葉かき（1/16、23、30、11/27）、除伐材整備（5/2）
【16日】
- 00年 カブ 森：草刈（6/23、30、7/12）、枝落とし（8/26、9/24）支柱撤去（2/12、26）、
間伐（11/25）、堆肥床整備（12/9）
アカマツ：除伐材整理（1/22、2/26、4/8、22）、草刈（6/11、7/8、11/18）
除伐（12/16） **【17日】**
- 01年 カブ 森：草刈（7/29、8/4）、支柱抜き・廃材などの林内整理（1/13、3/24、4/14、
5/26、7/14、8/25、9/8、29、10/13、11/17）
アカマツ：草刈（6/9、10/7）、除伐（1/13） **【15日】**
- 02年 カブ 森：林内整理・堆肥床整備（2/23、3/9、8/10）、草刈（6/8、15、22）
除間伐（7/20、9/28、11/9、16）
アカマツ：草刈（6/9、22、9/8） **【13日】**
- 03年 カブ 森：堆肥ヤード整備（1/25、4/12、11/15）、除間伐（3/22、4/12、9/14）
草刈（5/24、8/2）、シイタケ（3/22）
アカマツ：草刈（6/15）、除伐（6/21、9/21） **【12日】**
- 04年 カブ 森：除間伐（3/27、4/10、12/18）、草刈・堆肥床落葉整理（5/22、8/7、1/18）
アカマツ：落葉かき（10/9）、体験会・除伐（3/7、6/5、9/4） **【10日】**
- 05年 カブ 森：除間伐（1/22、3/19、10/30）、草刈（8/6、9/10）、落葉かき（1/22）
林内整備（12/10）、シイタケ（2/26）
アカマツ：体験会・除伐（6/11、11/12）、草刈（9/17） **【11日】**
- 06年 カブ 森：体験会・除伐（1/18、2/11、4/12、11/25）、シイタケ（2/11）
林内整備（5/27、11/25）、草刈（8/6、12/23）
アカマツ：林内整備（6/14、9/20、10/11、12/13）、草刈（7/8）、落葉かき（9/9、
11/22） **【16日】**

6

みなさんに支えられ！

これまで多くの学識専門家の先生やレンジャー、管理事務所の職員の方などに
ご指導、サポートいただけてきました。応援してくれているみなさんです。

福岡の実践保全活動のパイオニア

九州大学芸術工学研究院環境計画部門
朝廣 和夫



施設ボランティアとして発足した森会は、時にルールが市民活動の縛りになることもあり、苦労されたと思います。しかし、12年の実績を経て、立派な森の保全活動を担う主体になられたと思います。「保全」とは、面倒をみる、世話をすることとも言われます。生き物と市民の視線で実践する森会の姿勢は、いつの世にも、あるべき私達の姿だと思うからです。私は、「森の将来像づくり」の際に、森林調査やクヌギの間伐の必要性等をお話ししました。森に手を入れることで多様性を維持する。皆さんの様々な調査活動は、油山の多様性の状況を発見されたのではないのでしょうか。一方、森会の人々は、中村聡レンジャーが期待されたように、油山の外の活動にも大きな貢献をされてきました。これらの交流活動は、会の礎を磐石にしたと思います。継続は力であり、皆様、一人一人が大切な資源です。森の生長が、本当に楽しみです。

※朝廣先生には01年3月の勉強会「カブ森の森づくりを考える」、01年11月「森の調査の講義と実習」で、カブトムシの森の将来像に沿った保全管理の方法についてのご講義いただきました。

油山の二次林の特徴を生かした森づくり活動への期待

福岡県保健環境研究所
須田隆一



油山の二次林は、アカマツ林、落葉樹二次林、照葉樹二次林に区分されます。アカマツ林は福岡県レッドデータブックにおいてカテゴリーⅠ（緊急に対策必要）に評価されており、マツ枯れにより各地のアカマツ林が消滅するなか、残された植生として貴重です。また、落葉樹二次林は主にコナラが優占していますが、コシアブラ、ホオノキ、ヤマボウシなど山地ブナ林域に分布中心を持つ落葉樹が比較的多く見られます。スダジイ、タブノキなどが優占する照葉樹二次林は、主に斜面下部に分布し、比較的大きな木も見られます。かつて薪炭林や農用林として利用されてきたこのような二次林を市民ボランティアにより管理・保全していくことは大変なことです、とてもやりがいのある生産的活動です。いろいろな困難もあろうかと思いますが、油山の二次林の特徴をふまえて長期的展望のもと、多様性豊かな森の維持・復元をめざして今後とも活動を展開されますことを期待します。

※ 須田先生には02年7月の勉強会「森の管理作業と草本（草花）のカンケイについて考えてみよう」でカブトムシの森の草本層についてご講義いただき、以来「油山の二次林」「復元」をキーワードとした勉強会とそれに関する植生調査の指導をいただいています。

すごいぞ！森を育てる会

九州大学農学研究院
紙谷 聡志



森を育てる会のことを思うと、まっさきに思い出すのは、講習会等でお会いしたときに見せていただける皆様の笑顔です。また、講習会の最中は別にしても（笑：とても真面目な顔をされています）、フィールドに出たときには、本当にいきいきとした表情で観察に熱中されています。95年の発足以来、楽しみながら会を発展されてきていることは、素晴らしいことだと思います。さらに、楽しむだけでなく、油山自然観察の森の保全を、様々な視点で実践されていることも、とっても素晴らしいことです。

会の活動の一つであるカブトムシの森の保全は、森を育てる会だけでなく私にとってもノウハウをゼロから積み重ねているのが現状です。ですので、これまでの保全活動は、ゴールまでの最短コースで歩んでいるわけではなく、なかなかゴールにたどり着けない活動だったかと思います。しかし、この試行錯誤も、いずれは良い教訓となることを期待して、日々、前進させていきましょう。そして、近い将来、カブ森が生きものに満ちあふれたときには、「すごいぞ！森を育てる会」と言わせてください。

※紙谷先生には05年11月の「甲虫勉強会」においてカブトムシの森の管理方法を甲虫の視点から考える勉強会の講師をしていただきました。05年以降夏の甲虫調査のご支援をいただいています。また、02年9月にはセンター主催のセミナー「甲虫の多い森 少ない森」の講師もされています。

森を育てる会 記念誌寄稿

市民の森管理事務所
係長 青木 勇



森ものがたり記念誌発行おめでとうございます。私もいつも森ものがたりを読ませてもらっていますが、参加できなくても皆さんの活動が手に取るように伝わってきます。

森を育てる会はこれまで充実した活動を永く続けておられますが、特にカブトムシの森やアカマツ林については、立派な森に育てていただいていることを心からお礼申し上げます。

私も時々森を育てる会の活動に参加させてもらっていますが、皆さんが笑顔で楽しく取り組んでおられる姿を見るたびに、また参加したい気持ちになります。

これからも油山に本来生息する多種多様な生き物を観察できる森にするために、私共も森を育てる会の皆様の熱意に負けないように頑張りたいと思いますので宜しくお願いします。

最後に森を育てる会の益々の発展と会員の皆さまのご健勝を祈念しております。

※ 市民の森管理事務所の観察指導係係長として2005年4月着任。管理者の立場から森会へご意見やアドバイスをしてくださり、活動にもときどきお顔を見せていただいています。

(財) 日本野鳥の会

東 陽一

油山自然観察の森に2度勤務するという機会に恵まれました。1回目は1993年から96年3月。ちょうどカブトムシの森整備事業が始まった頃です。もとあったスギ林を伐採してクヌギなどの苗木が植樹されたので、当時は森というよりは草原に近い状態でした。カブ森の植生調査などを担当していましたが、本当に森になるのだろうかと少し不安もありました。95年には森を育てる会の最初の活動が始まりました。



2回目の勤務は2000年1月から2003年10月。4年ぶりでしたが、カブ森の木々の成長に驚きました。育ててきた木々をより大きくするために、森会の活動で間伐作業とそのための計画づくりをしたのが思い出の一つです。森会の特長は、森づくりの長期的な計画をきちんと立てていることだと思います。森づくりには長い時間が必要ですから、関わる多くの人々の思いを一つにまとめて、それに向けて進んでいくことは欠かせません。05年7月に油山を訪れる機会があり、より成長したカブ森、アカマツ林に感心しました。年に1回ぐらいしか見る機会がないと成長をすごく感じるのです。大雨でじっくり歩けなかったのが残念でした。森会の活動のさらなる充実を期待しております。

※ 東さんは森会担当レンジャーとして00年1月～01年4月と02年4月～03年9月までに2期、34ヶ月間も当会をサポートしてくださいました。

(財) 日本野鳥の会

掛下尚一郎

森会の担当レンジャーとしての初仕事が体験行事の実施でした。緊張していた私を皆さんが暖かくバックアップしてくださり、行事終了後、「よかったとよ」との言葉を掛けて頂いたときはホッと胸をなでおろしたものでした。また、自然観察の森がたくさんの方に支えられていると実感したときでもありました。



いま、皆さんが育ててきたカブ森はだいぶ大きく成長し、アカマツ林はアカマツ林らしくなり、自然観察の森が目指す森へと近づいています。これら森会が育てる生きものの豊かな森を油山の自然環境保全と次世代を担う子供たちや環境を学ぶ市民を育む場として積極的に活かしていくよう検討するのが私たちレンジャーの使命だと考えています。

12年前福岡の森林保全活動の先駆けとして立ち上がった会が、今後も変わらず社会に必要な団体として、また、皆さんにとって居心地がよい会であり続けるよう盛り上げていきましょう。そして施設のよきパートナーとしてこれからもどうぞ宜しくお願いいたします。

※ 03年10月から森会担当レンジャーになられた掛下さん。かけレンジャーの愛称で「森ものがたり」へも毎回ステキな写真と共にレポートを投稿してくれています。

記録編

7

いろいろな活動プログラム

やってみたいことを言い出した人が「言いだしっぺ」となって提案します。うん・えー会でみんなの了解が得られれば、OK。それが森会のルール。これまでいろいろなプログラムが行われ、ずっと続いているものも、休止中や終了したものも。

親睦・お楽しみ系・普及

山村塾合宿

中山間地の農林業の体験と会員の親睦を目的として企画されました。作業体験に加え、山村塾のみなさんから同業としての林業の現状など、現場の声を直接聞くことのできる貴重な機会となっています。

内容：野菜の収穫・選別・袋詰め、みかんの収穫、畑の片付け、畑の草取り、稲刈り、架け干し、脱穀、ヒノキの枝打ち、除伐、間伐、階段工、下草刈り、近くの牧場での乳搾り体験、炭焼き作業（炭出し、袋詰め、炭材の窯入れ）、鴨さばき、わら草履づくりなど

世話役：菊水、森（順）、中村（淳）、堀、山田

99年～06年まで毎年、1泊2日 ・延べ参加者数：大人104名 子ども18名 合計122名



落ち葉たき

97年より毎年冬の時期に、アカマツ林やカブ森の落ち葉を集め、キャンプ場で落ち葉焚きを行っています。作業で出た材を活用する機会であるとともに、火を囲むことで気持ちが和み、会員どうしの親睦の場にもなっています。当初食材はサツマイモを使った焼き芋だけでしたが、最近は、里芋、ジャガイモ、餅、シイタケ、銀杏、鯛の塩釜焼きなどバラエティーに富んでいます。

キャンプ

99年から1泊2日の草刈キャンプを実施しました。この頃はカブトムシの森の林床が下草で覆われ、エリア全域の草刈を行っていたこともあり、夏場の人手が足りていませんでした。そのため、参加者確保と会員同士の親睦を兼ね、夏休み期間中おこなうこととなりました。

初日（土曜日）の午後から集合し、会の運営などに関するワークショップ、キャンプ場にて飯盒炊さん、夜の観察会、バンガローで宿泊、翌日に、朝の観察会、草刈作業の後、お昼には解散というものでした。01年までの3年間実施されましたが、草刈作業量の低減と、世話役の負担の大きさから、夜のお泊り観察会へ移行して終了しました。

世話役：森（美）、古川（哲）、中村（淳）、有田



草木染

97～99 年の初夏に、草刈で出た草や持ち寄った玉ねぎの皮などを使い草木染を行いました。事前準備の大変さなどから〇〇年度以降は休止されました。世話役：森（康）、古川（深）

森のおまつり

97 年 11 月 23 日、98 年 11 月 22 日、99 年 10 月 30 日、油山市民の森主催の「森のおまつり」において、木工細工、活動写真の展示、バームクーヘン作り、マペットによる活動紹介などを行いました。事前準備に数回活動日をとられるなど負担はありましたが来園者には好評でした。「森のおまつり」の中止により 〇〇 年以降は行われていません。

木工・竹細工教室



99 年から毎年行われ、森づくりで出た材を生かす場であるとともに、木に親しみながら会員同士の交流をはかる場となっています。また一般の方々への活動の普及を行う際の有効なプログラムとしても活用されています。

間伐材の名札、木の枝の鉛筆、木のマグネット、松ぼっくりのツリー、小さな巣箱、竹とんぼ、水鉄砲、宝石箱、箒、竹の花入れ、樹名板、木の花かご、間伐材のパズル、ミニチュアテーブル・イス、木のビーズアクセサリー、クリスマスリースなど。石橋さんをはじめとする森会の匠たちの技と工夫

で毎年新しい作品が生まれています。講師：石橋、迫、山崎、鎌田 世話役：森（順）、本村、柴戸



よもぎだんご

春の訪れを待ち、ヨモギの新芽を摘んで、よもぎ団子を作っています。子どもたちに大人気のプログラムで、香り高いよもぎ団子に森の恵みを感じる 1 日となっています。

体験受け入れ

自然観察センターの行事「森を育てる会体験会」のお手伝いを長年してきた蓄積をもとに、03 年度は保全活動の中間支援団体：ふくおか森づくりネットワーク主催「里山体験リレー」で初めて会が独自に体験活動を運営しました。04 年度～「勤労者マルチライフ支援プログラム」（厚生労働省事業）、06 年度福岡ハート



ネット21」（福岡電力総連有志）などを受け入れ、保全体験プログラムを提供しています。

観察・調査系

観察会・ハイキング



97年9月にカブトムシの森の将来像を掴むため、能古島（福岡市西区）にクヌギの森の見学に出かけました。98年にはアカマツ林の作業開始を前に油山のアカマツの状況を観察するハイキングを行いました。また98年7月に夜の観察会を始めライトトラップを設置して主に昆虫の観察をおこない、以来夏の恒例行事となっています。特に02、03年には宿泊して夜と早朝の観察会・ハイキングとして実施しました。

油山各所の観察会（ハイキング）を01年度から年に

2～4回実施し、恒例行事として四季それぞれの森の様子を観察しており、自然について学ぶ機会として好評です。世話役：園田、谷口、有田、富永、安部

蝶の調査（ルートセンサス）

97年9月より開始し、98年4月より毎月、継続的にカブトムシの森の蝶についての調査することとなりました。季節、年度ごとの蝶の出現数、種数の変化から森の環境を計ることを目的に計画されたものです。03年度まで断続的に実施されましたが、蝶を同定できる特定のメンバーへの負担が大きくなり、04年度以降休止されました。世話役：谷口、有田

カブトムシ森（コドラート内）地図づくり・平面図づくり

カブトムシの森では95年よりコドラード（調査区）を設けてクヌギの生長調査をおこなっていますが、クヌギの位置を示す地図がなかったため、02年に測量をおこないプロット図を作成しました。

また、森の管理の様子を記録に残すためや、対外広報のツールとする目的で05年から平面図づくりが行われました。（38頁）世話役：富永、鎌田



樹木マップづくり



カブトムシの森の樹木についてもっと知りたいという素朴な思いから、01年より準備が始まり、02年度に8回、観察シートに沿って樹木の特徴を観察し、シートに記入しました。当初計画していたマップという形にはなりませんでした。03年度に観察した樹木のネームプレートを作成して設置するなど、作業地の樹木を深く知る機会となりました。世話役：田中

植生調査・クヌギの生長調査

29、40ページ参照

世話役：園田、阪下

甲虫調査

05年度の「甲虫勉強会」を前に講師紙谷先生からいただいた宿題は「森会で事前に甲虫調査」。ペットボトルトラップ調査の手法、同定について懇切な指導をいただきつつ夏の3ヶ月実施。手順を工夫しながら続けていく見通しがたってきました。 世話役：柴戸、鎌田

作業系

池づくり

97年カブ森A地区の水たまりに小さな池（ビオトープ）を4つ作り「四葉のクローバー池」と名づけました。しかし、土砂の流入が続き、池の上流に「しがら」を設けたりしましたが効果は薄く、さらに水量も低下したことなどから、これ以上の管理は無理と判断し、01年1月に事業終了となりました。世話役：菊水

シイタケ栽培

間伐材の活用目的で02年度より始められました。02年11月にカブトムシの森A地区のクヌギ17本を間伐し玉伐りの後、少し乾燥させて03年3月に菌打ちを行い、翌04年2月に初めてシイタケの発生を確認しました。05年2月、06年2月にも菌打ちを実施し、以来春と秋を中心に収穫を得ています。世話役：富永



カブトムシの森・アカマツ林保全作業

カブトムシの森では、下草刈り、間伐、堆肥床整備、枯れ枝落とし、アカマツ林では、除伐、落ち葉かき、地かき、堆肥ヤード整備、シダ刈りなどが行われています。世話役：古川、清水、迫、鎌田、他多数の皆さん



記録編

8

7-7ショップの記録

～みんなが語り合ってきたこと～

活動の原点といえるカブトムシの森の管理計画は、市によって作成されたものでした。しかし、自主的な運営のためには、会員が活動に何を求めて何をやりたいのかを、自らの言葉で語る必要があるという意識が生まれました。そこで、99年から会の方向性を探る話し合い（WS／ワークショップ）を行い、以来、保全計画を立て、それを見直していくというWSの流れが作られています。

会員の活動への思いを出し合い、会の方向性を探るWS

会の目的の確認

「森を育てる会ってどんな会?!」 ファシリテーター：志賀壮史氏

99年7月24日 参加者 19名

内容：お題「森を育てる会でこんなことがしたい！ 期待すること」

参加者が意見を出し合い、KJ法でまとめました。最初のキッカケは「自然に親しむ、生き物について知る」などであったが、「社会や環境に役立つ」など関心の広がりを感じるものとなりました。

この日の意見を6つのキーワードにまとめ、当会の指針としました。

「自然と親しむ」「仲間と語ろう」「生き物について知る」「社会や環境に役立つ」「子どもや大人に伝える」「心や体を癒す」

森のデザイン言いたい放題会

カブトムシの森の将来像のイメージ出し

00年4月15日 参加者 10名

カブトムシの森の将来像のイメージを自由に語り合いました。

- ・ 材が生かせる循環型の活動
- ・ 落葉樹の単林と常緑樹もある混交林と異なる意見
- ・ カブトムシの位置づけ
- ・ 森の遊び場作りなどの機能
- ・ 多様な生き物が訪れる森

多くの思いがあることがわかりました。反面、1つの森には担いきれない多くの理想の形（要求）であり、考えを整理していくことの必要性が認識されました。

カブトムシの森のデザインを考えるWS

コンセプトづくり

00年7月29日 参加者 17名 ファシリテーター：志賀壮史氏

20年後の森の将来像とそのために今できる事について考えました。

1. 油山やカブ森の自然、歴史についての講座
2. カブトムシの森を生き物や景観の視点から見て回り、課題や将来像のイメージを確認
3. 20年後のカブトムシの森の姿についてKJ法でまとめ、カブトムシの森のコンセプト作成
「あいうえおくあかるい・いこえる・うつくしい・えんどれす・おやかで楽しい」を確認しました。

森会のこれまでとこれからを考えるWS

作業地・組織運営の課題整理

01年7月28日 参加者 13名

3部構成（①会の運営、②カブトムシの森、③アカマツ林）でそれぞれに課題と成果についてフリートークキングをおこないました。

カブトムシの森 デザインづくりミーティング

保全計画づくり

02年2月17日 参加者13名

92年に施設によって策定された『「カブトムシの森・蝶の楽園」基本計画報告書』から10年を迎え、現状に即した中長期的な計画の見直しが必要になってきました。そこで、過去のWSやセンター行事「森の将来像づくりWS」の成果などの内容を踏まえ、10年後の森の姿を見据えた、会としてのカブトムシの森の基本方針を策定しました。

1. カブトムシの森の基本方針づくり

「里山に代表される二次林（具体的にはクヌギ・コナラを主とした林）の自然環境を復元する作業を行い、その象徴としてカブトムシなどの甲虫が生息・観察できるような森づくりをめざす」

（「カブトムシの森」と謳われているが、カブトムシはあくまでも象徴として捉えるというコンセンサスを得ました。）

2. カブトムシの森保全作業計画づくり

カブトムシの森を見て回り、地形やクヌギの生育状況、他の樹種などを見ながらこれから10年間の作業を洗い出し、地図に落としました。（36頁参照）

02年4月20日には、上記計画に沿った間伐木の選定と作業計画を策定しました。

カブトムシの森 短・中期保全計画ミーティング

成果と課題の検証

05年4月23日 参加者9名

02年に計画した間伐作業がほぼ終了したため、保全目標と現況を照らしあわせて評価し、今後数年の作業内容を検討しました。

1. レクチャー：「自然観察の森の地の歴史」「カブ森保全目標ができるまで、そして会のあゆみ」

2. カブ森の今！見学ツアー（現場確認）

02年中長期計画の目標と現場を照らし合わせながら成果と課題を確認しました。

3. ワークショップ

作業実績から計画に無理がある箇所が確認され、計画の見直しをはかることとなりました。

05年7月9日に間伐作業については現地をまわり間伐木の選定をおこないました。

カブトムシの森 保全目標づくり

保全目標再検討

06年9月23日 参加者16名 アドバイザー：須田隆一氏

05年4月の短中期保全計画ミーティングでは、計画の見直しの必要が確認されました。そこで保全目標「里山に代表される二次林」とは何かを考えるため、専門家を招いてのWSをおこないました。

1. オリエンテーション・講義

「自然観察の森とカブ森」「カブトムシの森誕生より現在まで」「二次林の復元として保全目標をつくるポイント」「油山の二次林データを読む」※「二次林データを読む」では会で実施した調査データの分析を受けた。

2. 現地見学：カブトムシの森を見て過去の作業経緯を振り返り、現在の課題などを共有した。

3. 保全目標づくり ワークショップ

カブ森は油山に少ない落葉樹林であることを確認しA地区はクヌギの優占する林、BC地区はコナラの優占する林とすることなどが決まり、管理計画案として地図に落しました。（37頁参照）このWSの内容は、具体的な作業内容にまとめ「カブ森保全5ヵ年計画」として示す予定です。

記録編

9

勉強会のあゆみ

～みんなが学んできたこと～

00 年ころまでワークショップで会や森への思いを確認してきました。これらの思いが油山の活動地で実現できるか考えたく講師を招いての勉強会を始めました。保全活動上の課題について自然科学の知識を得て保全目標、作業計画にフィードバックしています。近年は勉強会の目的達成のため講師の指導を仰ぎ事前の調査、勉強会の中で調査結果を評価する流れも出てきました。

第1回 カブ森の森づくりを考える《カブ森》01/3/10 朝廣和夫氏(現・九州大学)

カブ森の将来像にそった保安全管理の具体的方法について考えました。講師からは森会の現状について詳細な分析資料を受けました。(財)福岡市森と緑のまちづくり協会助成を受けることをきっかけに始めた勉強会の第一回となりました。

構成 第1部 ワークショップ：思いは活動でどう実践されているか検証

第2部 講義：クヌギ生長調査データ分析、森林構造の目標、調査の方向性

第3部 フィールドワーク：カブトムシの森にて カブ森作業課題洗い出し

世話役：森(順) 詳細：会報01/5/12号

この勉強会の結果をうけ、01年度カブ森保全計画案を作成しました。詳細報告：会報01/5/12号

第2回 森の調査の講義と実習《里山》01/11/10 朝廣和夫氏

森の管理作業には様々な価値観をもつ会員の将来像についての合意形成が不可欠。そのためには森の現状を客観的に示す調査が必要です。市民活動のレベルで可能な植生を中心とした調査の種類と実践について学ぶことを目的として実施しました。

構成 第1部 植生調査、測量実習の講義

第2部 植生実習、測量の実習：トラバース測量・植生調査(植物社会学的調査 毎木調査)

第3部 図面かき実習

世話役：森(順) 詳細：会報02/1/12号

第3回 アカマツ勉強会《アカマツ林》02/1/27 宮島寛氏(九州大学名誉教授)

アカマツ林の保全をはじめて4年余り、常緑樹の伐採などによりアカマツ林らしい景観となってきました。同時にこの林で次世代のアカマツが育つにはどうすればよいかという疑問、松枯れの被害も起きました。ここでアカマツについて学ぶ機会を持ちました。

構成 第1部 講義：松と日本人の歴史、更新のために必要な光と土壌について

第2部 実習：アカマツ林で土壌の観察 地かきの実習

世話役：柴戸 詳細：会報02/3/2号



アカマツ林保全「会の基本的考え方」をまとめました。 詳細：会報02/7/13

←アカマツの生育環境としての土壌状態を観察

第4回 草本勉強会《カブ森》02/7/27 須田隆一氏(福岡県保健環境研究所)

会発足来初めてのカブ森間伐を秋に控え、何を記録として残すことが適当かが課題でした。

2000年夏のワークショップ「20年後のカブ森を考える」では林床に多様な植物の開花がみられるカブ森、という夢を語りあいました。そこでこの視点からカブ森ではどのような草本層を目標としてもつことが可能か考える勉強会を開催しました。実習で林床植生調査を行いました。

構成 第1部 講義：現代の里山保全に必要なこと、里山の林床植生の再生・修復における調査の意義、里山の生物多様性の保全

第2部 実習：カブ森定置コドラート内で林床植生調査 (41頁参照)

世話役：柴戸

詳細：会報02/9/14号

草本調査は春(4月後半)、夏(梅雨前半・成夏)、秋実施が必要となり通年で調査を実施しました。

第5回 草本勉強会2《カブ森》03/4/26 須田隆一氏

春の調査にあわせ、自然再生推進法など近年の国の環境保全施策と私たちの保全のかかわりなど講義を受けました。また前年秋の会独自調査へのコメントも受けました。

構成 第1部 講義：林床植生調査・位置づけ 秋の会独自調査へのコメント

なぜ調査をするのか・自然再生推進法と里山保全、ボランティア調査の意義

第2部 調査：カブ森定置コドラート内・周囲で春の林床植生調査 (41頁参照)

世話役：柴戸

詳細：03/7/5号

第6回 草本勉強会3《カブ森》03/10/12 須田隆一氏

2回の草本勉強会と通年の調査の集大成であるこの回ではデータをもとに林床植生の特徴、管理の選択肢について講義を受けました。また現代の里山保全における生物多様性：具体的には地域固有性とデータを元にした順応的管理の重要性について学びました。森林全体を把握して管理するには森林全体を把握する調査が必要として実習では植物社会学的調査を学びました。

構成 第1部 講義：林床植生調査1年間のまとめ、管理の方向性について、今後の調査について

第2部 実習 アカマツ林にて植物社会学的調査の実習 (43頁参照)

世話役：柴戸

詳細：会報03/11/9

第7回 森を歩く 森を知る《里山》04/4/27 須田隆一氏

第6回の勉強会で地域の固有性を知ることが現代の里山保全には必要ということを知りました。またカブ森の保全目標には「里山に代表される二次林の自然環境を復元する」という言葉があります。そこでこの勉強会では油山らしさ、二次林とは何かを考えました。

構成 第1部 講義：二次林とは 二次林の保全にむけて

第2部 自然観察：油山の二次林を見て歩く

第3部 観察と講義のまとめ：油山二次林の特性、林縁の開花植物、人にとっての心地よさ

世話役：柴戸

詳細：会報04/5/15

第8回 甲虫勉強会 《カブ森》05/11/23 紙谷聡志氏（九州大学）

カブトムシの森保全目標は「里山に代表される二次林（クヌギ・コナラ中心の林）の自然環境を復元する作業を行いその象徴としてカブトムシなどの甲虫類が観察できる森」。造成以来10余年、現在の甲虫層、今後どのような保全をすれば目標に近づくかを知りたく開催しました。ワークショップではカブ森の利用について思いの「たな卸し」をしました。管理事務所、施設、会員各人の立場から意見が寄せられました。またこの勉強会の準備として夏に甲虫調査を行いました。

構成 第1部 講義：カブ森の今 05年度夏会調査、他調査より

第2部 フィールドワーク：甲虫の一生の身になってカブトムシの森を見る

第3部 ワークショップ：これからのカブ森を考える 甲虫の視点 ヒトの視点

世話役：柴戸 詳細：会報06/1/8

幼虫の生育に適した環境づくり作業を06年度活動に反映しました。

第9回 油山の里山勉強会 《里山》06/1/8 須田隆一氏

05年4月にカブ森の過去2年の作業を振り返りました。場所によっては地形などの条件で目標そのものが不適切という課題を確認しました。偶然講師の研究課題「市民による里山調査」協力依頼を受け05年10月にカブ森隣接地で簡易的な調査を行っていました。この調査及び勉強会のため同じ内容で追加実施した2地点のデータを元に、改めて油山の二次林について知りカブ森の保全目標の具体的な内容を考えるため勉強会を開催しました。（調査概要については42ページ）

構成 第1部 講義：油山の森4地点の調査結果、森林植生調査の方法、二次林の成立と環境要因

第2部 意見交換：カブ森の目標検討にむけて

世話役：柴戸 詳細：会報06/3/11

06/9/23 実施「カブトムシの森目標づくり」に反映しました。

第10回アカマツ林勉強会 《アカマツ林》06/6/18 久米篤氏（富山大学）

1999年以来会活動地アカマツ林では松枯れがすすんでいます。なぜ枯れるのか、保全ボランティアであるわたしたちは何ができるか考えたく勉強会を開催しました。

構成 第1部 講義：基礎から学ぶアカマツの話、森林理解の基礎・光合成、アカマツ衰退の理由、
人の利用停止がもたらす影響、
強いアカマツ林をつくるには

第2部 観察：油山のアカマツ林を見て歩く

第3部 意見交換：これからのアカマツ林の
保全を考える

世話役：柴戸 詳細：会報06/3/11

06/11/11 策定「アカマツ林保全5ヵ年計画」
(39頁)に反映しました。



記録編

10

調査の記録

「森を調べる」は当初から会の活動プログラムにあり、様々な調査を実施しました。傾向として調査用紙の書式を最初に作ったもの、会報へ迅速な報告したものが活用されています。02年ころから目的を絞って調査を開始し調査手法や評価で専門家の支援を仰ぐようになりました。

カブトムシの森での調査

名称	実施年	内容・ねらい	成果
植物調べ	96～99	草刈り管理有無の林床とクヌギ生長への影響をコドラート内で把握	調査地に管理差をつけないことになり終了。当時の植物相記録
クヌギ生長調査 (40ページ参照)	96～		草刈の有無だけでクヌギの生長の差を判断する要因にならないとの指摘から、クヌギ生長の記録のみを継続中
昆虫調査	96	活動中に採取した昆虫名を調べる	専門家の協力を得て記録が残る
蝶ルートセンサス	97～03	森の環境変化をはかる	担当者退会のため休止 取りまとめたデータは無く簡単な出現記録のみ有
全クヌギ・コナラ調査	02	胸高直径、樹勢調査 伐採木を決定する準備	この調査に基づき伐採木を決定し間伐を実施
林床植生調査 (41ページ参照)	02～03	カブ森の林床植生の目標検討を目的	年間のカブ森林床層把握し勉強会で管理方向の可能性を知った
甲虫調査	05～	勉強会の準備でペットボトルトラップ調査。	勉強会で夏季甲虫相について解説を受け管理に反映

アカマツ林での調査

名称	実施年	内容・ねらい	成果
植生調査	97	保全開始前の現況把握	踏査で木本を中心に出現種記録
毎木調査	99	松枯れがはいりかけた森の現況把握	範囲が後でわからなくなった。毎木調査結果は会に未報告。
マツ個体数調査			
実生調査		次世代のマツ生長把握	調査方法、評価が課題となり中止
植物社会学的調査 (43ページ参照)	03	森林を把握する方法を学ぶため勉強会の実習として実施	アカマツ林の森林としての記録を得た。

油山での調査

名称	実施年	内容・ねらい	成果
カブ森隣接地植生調査	05	「市民による里山調査」研究協力で実施 以下2件も同じ方法	作業地以外の油山の二次林を調べ記録を得た。
落葉樹二次林植生調査 (42ページ参照)	05	カブ森の目標「油山の二次林」を把握する	カブ森隣接地調査とあわせ勉強会で解説をうけ保全目標に反映
竹侵入地植生調査	06	油山二次林のひとつとして知る	カブ森目標WSの中で解説をきく

記録編

11

安全な活動への取り組み

野外で刃物を使い広い年齢層が参加する森会の活動。それを支えるのは事故や危険の確率をさげる工夫。年24回の活動に際し毎回作成する実施計画書、活動日に帯同する救急リュック、年1度の安全講習、通年の保険などいろんな取り組みを行っています。

1. 安全講習会・救急講習会

第1回「救急ミニ講習」 01年6月14日 説明：柴戸慶子氏（会員）
内容：救急リュック紹介 ポリエソルバーの使い方 緊急時の連絡手順確認

第2回「安全講習会」01年12月8日 講師：中村淳氏（会員）
内容：野外活動の安全、危険の中和と回避、事故を起こす危険の種類と事故の3要因

第3回「安全講習会」02年5月15日 講師：中村淳氏
内容：活動計画に必要な安全対策、安全な組織・運営のあり方、実施計画書作成実習・実践・評価

第4回「森づくり活動のための救急講座（冬編）」03年1月18日・26日
講師：竹下裕一氏（赤十字救急法指導員）

内容：救急法とは、脈の確認、心肺蘇生法、傷病者の保温、体位の管理、運搬法、傷・ケガの処置、止血法、三角巾の使い方。※「こうのす里山くらぶ」と合同主催

第5回「森づくり活動のための救急講座（夏編）」03年6月28日 7月12日 講師：竹下裕一氏
内容：冬編の振り返り、野外における危険な動植物、熱中症の対応、運搬法、ロープワーク、三角巾の使い方。 ※「こうのす里山くらぶ」と合同主催

第6回「救急講座」 04年7月3日 講師：竹下裕一氏
内容：救急講座の振り返り、危険予知トレーニング、模擬訓練（「後から出発したグループが先に
出たグループの事故現場に遭遇した」という設定で救急対処のシミュレーション訓練を実施）

第7回「緊急時の対応訓練」04年12月18日
内容：カブ森にて万一事故が出た場合の役割分担をどうするかなどの模擬訓練。現場から一番近い電話を使って119番に電話を掛ける通報訓練。

第8回「安全講習会」05年12月17日 講師：小森耕太氏（山村塾）
内容：グループリーダーが身につけておくべき安全管理、安全な間伐作業方法（実践）、危険予知地トレーニング（リスクアセスメント）

第9回「安全講習会」06年10月15日 講師：（会員）竹下裕一氏、石橋英明氏、迫盛寛氏
内容：活動中のリスク管理（事故事例に学ぶ、危険生物の生態と回避、リスクの軽減、実施計画書から考えるWSなど）、道具の使い方と手入れの仕方、ロープワーク

2. 救急リュック

活動に帯同。外傷対応の医薬品、収納医薬品・緊急連絡先（施設・医療機関）一覧を収納。

3. 森会体操

作業の前の準備体操や作業後のクールダウンとして毎回実施します。作業で使う部位を重点的にストレッチする会のオリジナル体操。無理なく、楽しく、覚えやすい内容です。（会員の林靖男さん考案）



4. 実施計画書に見る森会の1日

安全で円滑な1日を支える大切なツールです。年24回毎回の活動に際し世話役が作成、1週間前までに会代表、会安全担当（07年度から復活）、施設レンジャー、関係世話役に送りチェック。活動日オリエンテーションで全参加者に配布し、1日のプログラムを共有します。

実施計画書(油山・通常活動用)

日にち：2006 / 8 / 6 (日)		世話役名：古川	
プログラム名：カブ森の草刈、枝打ち		助役：柴戸	
目的：カブ森整備、ルート確保、調査		安全世話役：小森	
募集方法・時期：「森ものがたり」7/5号、ML		参加予定者数：13	
活動場所：カブ森	集合 10:00	解散 15:00	
参加者持ち物 長袖、長ズボン、帽子、滑り止めつき軍手、タオル、雨具、筆記用具、カマ、弁当、飲み物、ベルト	運営者準備品 カマ、剪定ばさみ、高枝ばさみ、砥石、熊手、ショウケ、ベルト ブルーシート、救急リュック カメラ、ビニールバッグ		費用 飲み物代
目標 カブ森ルート沿いの草刈（C地区中心）、通路に覆いかぶさった枝を落とす。			
TIME	プログラム	担当	場所・内
9:30	世話役集合	古川	柴戸さんと進行確認
10:00	参加者集合		
10:05	オリエンテーション		作業内容の説明、道具準備
10:30			
10:40	移動		現地説明（危険対応・作業方法）作業開始
11:15	作業開始		
11:45	休憩		時間案内、水分補給
12:15	休憩		時間案内、水分補給
13:00	昼食		
13:40	作業再開		道具確認、作業状況確認
14:00	休憩		道具片づけ
14:15	作業終了		
14:30	移動		センターに入る前に服のごみを払う
15:00	ふりかえり 解散		
C地区が予定より早く終了したのでA、B地区実施 今日の報告：メーリングリストへの投稿は安全世話役小森。			
天候による変更プログラム：持ち帰り材を短くする。			
安全対策	下見	（開催直前の状況を確認する）	
	プログラム作成時	想定される危険	対 策
	ハチ・ヘビ・毛虫 鎌 熱中症	近づくかない カマは地面に放置せずビニールバッグに入れる 休憩水分補給	徹底する方法 事前説明 一斉に休憩を取る。

今日は安全世話役！救急リュックをもち、みんなの様子を見ながら安全な活動をサポート。

道具の準備に手間どる次回からはもっと時間をとったほうがよいかも・・・

シイタケホダ木の天地替え
上下ひっくりかえす

関係先への届出・連絡等

施設（レンジャー）からの指導事項等

当日までの準備活動予定：7月会報活動予定に案内掲載依頼、7月最終活動日終了後に現地下見。

実施1週間前までに実施計画書作成。代表・施設・関係スタッフに送付、チェックをうけ修正、8/1 森会メーリングリストで最終案内、飲物購入。

5. 活動実施記録

作業前に安全世話役が参加者全員の氏名を記録。安全上の留意点などへの対応を確認してチェック。活動終了後、参加者に感想を記入してもらい、活動の振り返りの手立てとします。